

1 はじめに

1.1 目的

逆接確定条件の接続助詞ノニは準体助詞「ノ」の発達に伴い接続助詞ニから発生したものである。ところが、ニとノニの間には意味用法に差異が見られる。ニは順接逆接などにかかわらず広く様々な接続に使用されたが、ノニは情意的¹な逆接確定条件の意味にしか使用されない。本論文はノニが定着を見せる江戸後期を中心に、ニとノニの使用比率の変化を追ってその消長を明らかにすること、そしてその意味用法の変遷を観察し、ノニの意味が限定された要因を近代日本語における分析的傾向の観点から考察することを目的とする。

1.2 調査方法

本論文の調査資料として、江戸後期・明治初期の江戸・東京の話しことばを強く反映していると考えられる、以下の文学作品(口語資料)を使用する²。

(滑稽本)

『譚話浮世風呂』式亭三馬 1809-1813 (日本古典文学大系) [浮世風呂]

『柳髮新話浮世床』式亭三馬 (除三編)³ 1813-1814 (朝日日本古典全書) [浮世床]

[以上二つを合わせて、三馬作品と称す]

『花暦八笑人』滝亭鯉丈 (除五編) 1820-1834 (岩波文庫) [八笑人]

『妙竹林話七偏人』梅亭金鷲 1857-1863 (講談社文庫) [七偏人]

(人情本)

『春色梅児誉美』為永春水 1832-1833 (日本古典文学大系) [梅児誉美]

『春色辰巳園』為永春水 1833-1835 (日本古典文学大系) [辰巳園]

[以上二つを合わせて、梅暦と称す]

¹ 本論文中で言う情意とは、当然起こると思われたものとは異なる事態が起こったことに対する、意外だという気持ち、または意外に思い、さらにそれに対して抱く不満や非難を指す。

² 資料一覧は 『作品名』作者 刊年 (出典) [本論文における略称] の形で表示する。

³ 『柳髮新話浮世床』三編は作者が異なるために除外する。三編作者は滝亭鯉丈である。同様に『花暦八笑人』五編は作者が異なるために除外する。五編上は一筆庵主人、五編下が與鳳亭枝成である。

『春色恋の染分解』山々亭有人 1860-1862 (人情本刊行会) [染分解]

『花暦封じ文』山々亭有人 1865-1867 (慶応年間) (人情本刊行会) [封じ文]

[以上二つを合わせて、有人作品と称す]

(明治初期資料)

『牛店雑談安愚楽鍋』仮名垣魯文 1871 (『牛店雑談安愚楽鍋用語索引』国立国語研究所) [安愚楽鍋]

“KUAIWA HEN” E. M. Satow 1873 (『会話篇 復刻版』東洋文庫) [会話篇]

『怪談牡丹燈籠』三遊亭円朝 1884 (『三遊亭円朝全集第1巻』筑摩書房) [牡丹燈籠]

『当世書生氣質』坪内逍遙 1885-1886 (『坪内逍遙集』筑摩書房 明治文学全集 16) [書生氣質]

『新編浮雲』二葉亭四迷 1887-1889 (『二葉亭四迷全集第1巻』筑摩書房) [浮雲]

用例は原則的に会話文からのみ採取し地の文は除外した。会話文であっても「上方商人」「田舎出」などの注記があり、江戸・東京のことばではないと判断できる発話は除外した。例外として、牡丹燈籠は落語速記資料であるため、地の文にあたる箇所も話しことばを反映しているものとして用例対象とした。また、浮雲は「言文一致体」の実現を目指した文学作品であり、その地の文は口語を反映させているものと考え、これも採用した。ただしそれぞれ会話文の用例と区別した上で必要に応じて使用する。

2 使用率の変化

2.1 準体助詞「ノ」の発達

1.1節において述べたようにノニの成り立ちは(準体助詞「ノ」+接続助詞ニ)であり、当然その成立は準体助詞「ノ」の発達と大いに関わるものである。活用語連体形によって作られる準体句を直接助詞が承接する形(連体形準体法)は、近世になって準体助詞「ノ」が使用される形に変化していく。こうした準体助詞「ノ」の定着についての先行研究には、原口(1978)や田上(2000)の論考がある。

原口(1978)では、明和以降の洒落本、寛政から文化期の『古今集遠鏡』と浮世風呂・浮世床、そして天保以降の戯作を資料として、準体助詞「ノ」が定着していく様子を追っており、本論文の調査と資料の重なる部分がある。田上(2000)では、原口(1978)において資料が乏しく明確な傾向の得られなかった明和以降寛政以前について、詳細を明らかにすべく調査を行っている。これらの調査結果の概略を示す。

まず明和以降寛政以前の洒落本の様相である。これについては原口(1978)の調査結

果を覆す結果となった田上(2000)の調査結果を参照するが、それによると原口(1978)における分類の「受け型」「括り型」⁴とも「ノ」の使用は極めて少ないことが分かる。以降の時代は、原口(1978)の調査によってまとめる。原口(1978)では、寛政から文化期においては未だ連体形準体法の用例が多いが、天保期以降の戯作には「ノ」の十分な定着が見られるという結果が出ており、「口頭語における連体形準体法の明確な減少期を、資料の上では天保以降に置くことができそうである」(443p.)とする。ただし、資料によっては時代が下るにもかかわらず準体助詞「ノ」がほとんど現れないようなものもあり、それについて準体法は「守旧的」文体に多く現れ、「準体法を専用とする資料が存在し、準体法の多少は文体的特徴を示すキー・ワードの役割を果たす」(449p.)とも述べている。また、「接続形の「ノニ」について別に取り上げて数値が示され、『古今集遠鏡』の俗言解や、『浮世風呂』での相接した使用を前後として、その出現に截然とした区別が見られる」(443p.)とあって、天保以降の資料において明らかにノニが優勢であるという、他の準体法とよく似た様相が示されている。

以下こうした先行研究を踏まえて、調査資料中のニとノニの使用比率とその変化の詳細を追ってみたい。ニには逆接以外の用法があるがここでは逆接用法のみを持つノニにその照準を合わせ、逆接の意味に限った、かつ文末用法を除いたニとノニの様相を、図表1の数値をもとに見ていく。

2.2 滑稽本・人情本における様相

図表1によると三馬作品においてニは20例(53%)、ノニは18例(47%)という数値であり、ほぼ同程度に使用されている様相が得られる。山田(1936)の調査においても、三馬作品のニ・ノニについて、ニは劣勢ではないという結果を示している。

「に」は文語系統のものであるが、常時では「のに」に比してその勢力は特に劣勢であるとは思はれない。両者の用例数を統計的に示せば次の如くである⁵。

	浮世風呂	浮世床	計
に	一六	一五	三一
のに	一七	二	一九

(184p.)

⁴ 「修飾語に含まれる用言と被修飾語(顕在化しない場合も含む)の間に格関係があるものを「受け」、そうでないものを「括り」としてわけ」(原口(1978)434p.)

⁵ 山田(1936)の表と本調査の数の差は、文末用法の除外や意味用法の認定の違いによるものと考えられる。例えば山田(1936)に逆接の例として上げられている後掲(34)の用例を、筆者は累加(3.4節に詳述)の用例として捉えた。また、三馬作品には順接的用法のニも現れるが、山田(1936)にはそれについての言及はない。

三馬作品の段階では、ノニも定着を見せながら未だニの勢力は衰えず、拮抗している様子が分かる。八笑人においても、ニが 15 例(56%)ノニが 12 例(44%)という数値であり、三馬作品と合わせて考えて、19 世紀初期の段階ではやはりニの勢力は衰えていないと言える。これが滑稽本末期の七偏人に至ると、ニが 10 例(38%)、ノニが 16 例(62%)と、ノニの使用率が上回る。この段階のニの数値も低いものとは言えないが、この時期のノニが十分に優勢であることを伺わせる。このように滑稽本において、19 世紀初頭から後半の間にノニが勢力を伸ばすという現象が見出せる。

しかし人情本においては滑稽本と数値に大きく差が出る。梅暦ではニが 7 例(18%)、ノニが 33 例(83%)、有人作品ではニが 8 例(25%)、ノニが 24 例(75%)と圧倒的にノニが優勢という結果であった。また、梅暦と有人作品との間に使用率の変化がなく、滑稽本に現れたような現象は見られない。滑稽本にニの使用が衰えず見られる一方、この人情本の結果からは、ノニの使用が 19 世紀前半にすでに十分な勢力を見せており、この時期には両形式が混在していて、その現れ方は資料の種類によって差が見られるという様相が確認できる。原口(1978)では特に取り上げられていなかったが、このように、同じく江戸後期戯作でありながら使用比率に隔たりが見られる点問題である。

この資料の種類による差については、使用者の属性の問題が関わるものと思われる。

その属性の問題を確認してみよう。図表 2 はニとノニの使用率を男女別に示したものである。これによってニとノニの比率を男女別に見ていくと、ノニの使用は女性に目立ち、ニの使用が男性に目立つという差異が出てくる⁶。女性は年代を問わずある程度出現数のあるどの資料においてもノニの方を中心に使用している。一方男性は、三馬作品でも八笑人でもニの使用率の方が高くなっている。しかし七偏人に至るとその使用率は逆転し、ノニが優勢になる。滑稽本におけるニからノニへの推移において同様の様相が見られたが、それは男性の使用における変化だったわけである。ただし、八笑人とさほど年代の離れていない梅暦において男性もノニが優勢である点を考えると、結局さきに見たように、ニとノニの使用は 19 世紀の初めから終わりにかけてははっきりとした変化を見せるわけではないようだ。

こうした現象から資料の種類による差の要因を考えてみる。ノニの使用は全体的に女性の方が多い。人情本は女性登場人物が中心の物語で、また遊里の周辺が舞台とな

⁶ 原口(1978)に、「ちなみに、『浮世風呂』での男女の別による用例の分布は、(中略)幾分女性に準体助詞の使用が多い。『浮世床』(上方商人作兵衛と巫女の例は除いた)では男性の事例のみが見えるが、概ね『浮世風呂』の傾向に一致し、括り型で準体法の使用が目立っている。男女で使用の差があることも考えられる。」という指摘があり、ここでの結果はニ・ノニのみの様相ではあるが、この指摘との合致を確認することとなった。

っていることから、男性の登場人物もその関係者である芸者などが含まれる。そうした舞台の影響で、男性のことば遣いにもあまり堅苦しきのない要素が入っている可能性がある、ということが要因として考えられよう。

2.3 明治初期資料における様相

明治初期資料においては概ねノニの方が優勢となっている。はっきりとノニが優勢であるのは浮雲である。対してニの出現の目立つものとしてはまず牡丹灯籠が上げられる。また書生氣質も、牡丹灯籠と比べて両形式とも出現数は少ないながら同様の様相が見られる。牡丹灯籠は江戸時代中期を舞台とした武家階級中心の物語であり、書生氣質の登場人物は荘重な口調を好むという特徴がある。つまりこの二つは保守的で堅苦しいことばが使われやすい傾向のある資料であり、そうした傾向によってより古い形であるニが出現しやすかったものと考えられる。牡丹灯籠と浮雲の地の文という、口語的ながら会話体ではない文体においてニが専用されている点からも、文体の保守性とニの使用とを関連づけられるだろう。この点、2.1節で触れた原口(1978)の「準体法の多少は文体的特徴を示すキー・ワードの役割を果す」という指摘も参照したい。

しかし浮雲の様相に加え保守的な傾向のある資料においても会話体でニがノニを上回ることなく、また、滑稽本・人情本と同様に男女別に見ると、男性においても用例数は少ないながらニよりノニの使用率が上回っている。明治初期資料全体のこうした傾向は、江戸後期にニの使用が根強く残存している資料があることと比べて極めて特徴的である。ここから、江戸後期から明治初期にかけてニからノニへ移り変わっていく様相が、ある程度確認できるものとする。

2.4 ニの使用形態の定型化傾向

さらにニの衰退傾向の詳細を見るために、用例の実体を資料ごとに見ていく。

ニの出現率の高い滑稽本は、なおかつ出現の様相が多様であり、何らかの形態に偏ることも、保守的な特徴などが目立つこともなかった。また人情本も同様であった。

(1) いつでも附馬^{つきま}を曳連^{ひきつれ}て、あたり近所^{きんじよ}の恰好^{かつこう}も悪い^{わり}に、兎角^{とかく}外聞^{げいぶん}といふ事をしらねへだ (風呂三下 223-08 ばあさま●→ばあさま▲)

(2) 一人で残^{ひとり}つて食^{のこ}ふ時^{とき}はおれでもマア自身^{じしん}洗^{あら}ふ気^きになるにそこは平気^{へいき}な物^{もの}だ (床初下 147-04 銭右衛門→all)

(3) ぜんてへこゝら迄、一ツ所にこよふといつたに、先へ来てしまった。(八笑人 二下 105-13 眼七→呑七)

- (4) それよりのろ松はどこをうろついて居るだろふ。もう出てくればいゝ、はじめてもいゝ時分だに。 (八笑人二下 109-05 出目→呑七)
- (5) ハテ残念な、今朝こそ思つたに、矢張りこつちが遅れたかと、 (七偏人五下 155-02 虚呂松独白)
- (6) 伯父の死んだに葬式の供にも立ず捨置と、世間へも聞えて不濟 (梅兎誉美三八 167-04 藤兵衛→お由)
- (7) 旦那や座敷で食傷する時もあらうに、盗み喰までこせつかずとも、いゝじやアないかへ (辰巳園三-七 348-06 米八→仇吉)
- (8) 大概平常からの様子でも知れそうなものですが、態と知れない振をして、真実にお前はんは罪ですよ。 (染分解初上 152-05 小萬→花雪)
- (9) アレサ、主も聞き訳のない。夫れ故先刻から種種分解を申しんすに。 (染分解三上 290-03 お重→忠六)
- (10) 折角入らしつて下すつたに、折悪敷で御座りますね。 (封じ文三上 323-08 七吉の母→橋三郎)

2. 2節で確認したように人情本におけるニの出現率は低い。しかし出現率が低いながらもその現れ方は多様であり、その点では滑稽本とともにニの勢力は衰えきっていないようである。

次に明治初期資料のニの用例を、浮雲と書生気質を中心に検討する。2. 2節で、数の上でノニの明らかな優勢を確認した浮雲の、唯一例から見てみよう。

- (11) 本田なぞに見返えるさえ有るに人が穩かに出れば附上つて誰が誰に別れるのだとは何の事です (浮雲二 133-09 文三→勢)

この「サエアルニ」という形態は、もう1例、書生気質に見られる。

- (12) ナンダ此野郎。他の羽織をかるさえあるに。なまいきに悪くいふな。 (書生気質三 070 下-06 守山→倉瀬)

これはごく定型的な形態であるかと思う⁷。また浮雲には文末用法のニが1例見られたが、地の文に近い環境である独白部分であるため保守的要素を含み、さらに「アルマイニ」という現代語でも散見する定型的形態であった。このような様相は、浮雲におけるニの衰退を一層はっきりと示すものであると思う。

次に書生気質の様相を見てみよう。ニの用例は5例と少数である。全例を示す。

- (13) 親父の脚をかぢつたり。慈母の脚をかぢらないで、自分の腕で遊べば能に。実

⁷ この「サエアルニ」形式はCD-ROM版『新潮文庫の100冊』において5例確認された。

- に肝ッ玉のケチな奴等だ。(書生気質三 071 下-08 守山独白)
- (14)ヲヤ。今日は火曜日だに。どうしてお出でなすつたらう。(書生気質十三 126 上-05 お常→下女)
- (15)大方おめへを便にしていっただのであらうに。おめへが居ないから。(書生気質十八下 152 下-02 源作引用)
- (16)此間寄送てから間がないやうだに。どうも筆まめな男だネエ。(書生気質十九 154 下-24 小町田→宮賀)

もう一つは浮雲のところでも述べた(12)の「サエアルニ」の用例であり、慣用的なものであった。用例(13)は「仮定条件表現+イイニ」という反実仮定の表現で、これは不満の表現として典型的なものかと思う。また、(15)の「ウニ」のような形態は、現代語でも現れることのあるものである。このように慣用的形態とも取れる例が3例あるが、しかし少数例かつ各形態が1例ずつであるため、確たることは言い難い。ただしここで文末用法も見てみると、その表現には偏りが見られた。書生気質の文末用法は7例。そのうち6例が「～トイウニ」という形態であった。これも不満を現す慣用的な表現であろう。また残りの1例は「仮定条件表現+イイニ」であった。

- (17)マア聞たまへといふに。(書生気質七 092 上-15 倉瀬→継原)
- (18)アレサ源どん。マア待ネエといふに。(書生気質十五 132 上-10 お秀→源作)
- (19)只恨らくは格子戸がまづいな。もちつと氣取ツてくれゝばいゝに。(書生気質十八 149 下-05 倉瀬→守山)

以上、文末用法も合わせて見てみると、書生気質におけるニの使用は定型的な傾向があるように思われる。2.3節では、書生気質は牡丹灯籠とともに保守的性質を持つ資料であると述べた。そのような同様の特徴を持つ二つだが、しかし書生気質と違って牡丹灯籠には偏りと言えるような様相は見られない。用例の一部を示す。

- (20)御門番だからと申しておくへどろぼうが入り、殿様とちゃんちゃん切り合っているに門ばかり見てはられません(牡丹灯籠五 030 下-06 孝助→お国)
- (21)たいがいの者ならそう打ち明けては言えぬものだに、おれが殺したとすみやかに言うなどはこれは悪党(牡丹灯籠十八 106 上-06 志文→伴蔵)

牡丹灯籠は2.3節で触れたように江戸の武士が中心の保守的な性格を持つ資料である。偏りのないニの出現もこうした傾向によるところであろう。対して書生気質も同じく保守的ながら、やはり明治初期のまさに「当世」の若者のことばを反映したものであり、そうした特徴の違いが、このニの現れ方の相違を生んでいると見られる。この書生気質の様相は、滑稽本などとは異なり、浮雲の様相により近いもののように

思われる。

こうして用例を検討していくと、江戸後期から明治初期にかけてニが衰退していく様相が、より明確に確認できるのではないだろうか。

3 近代語における分析的傾向とニ・ノニ

3.1 ニの意味用法

さて、全体的な使用率や形態に続いて、意味用法の面からその消長を見てみよう。ニは従来指摘されているように、前件と後件をただつなぐものであり、接続助詞のニは様々な意味用法で使用されている。例えば山内(1970)は次のように解説している。

「に」は、ある叙述と、それと並んで存し、それを前提として起こり、あるいはそれに継起する動作・状態・判断などについての叙述と結びつけるのである。その中で前と後がたまたま因果関係が考えられそうなばあいがあり、たまたま矛盾することがある。我々は今でも「説得してみると、承知しないんだ」のように「けれども」「のに」と明瞭な条件表現にしてよいところを漠然とすることがある。古代の情意性の強い言語ではなおさらであって、未分析な包括的な論理性の弱い接続表現が栄えていたと考えられる。(62p.)

また山口(1996)には次のように述べられている。

「に」はこの様に意味関係からいえば順接的なものと逆接的なものがあり、どちらにも片寄らない。だが、実はその事自体、「に」が表示しているのは、積極的な順接でも逆接でもないこと、むしろ(中略)一つの場面とそこに存在・成立する事柄というほどの関係であるという見方を可能にする。(34p.)

しかし此島(1966)に「時代の下るにつれて逆接の例が多くなって来ている」(201p.)と指摘されているように、今回扱った資料内では逆接が大部分を占めていた。まずはニが逆接に偏った事情を考えてみたい。

接続助詞ニの中でより格助詞的な用法と思われるものは除外して、順接確定条件表現(因果関係表現)のものと逆接確定条件表現のものとを用例として採取し、数値を示したのが図表3である。

図表3に現れているように、順接用法はほとんど見られない。全用例を示す。

(22) エ、きたない足だ。お鼻の下もばゝツちいだからお湯をかけてお洗ひ。番頭
さんがお叱りだによ。(風呂三下 207-09 たこ→小児)

(23) 金持の根性は別だによ。おらが隣の多羅福屋を見ねへ年中あたじけなくして

食ふものも食はずに金をためて (床初下 148-01 銭右衛門→all)

(24) あんまりひもじいにな、わんぐりと食たが因果案の如番木鼈であつた。(床二上 167-06 斑犬(口寄せ)→ばゝ)

(25) 「起きろ起きろ」と言われて源治郎は頬が冷やりとしたにふと目をさまし、と見れば飯島が (牡丹灯籠十五 085 下-10 地)

(26) 死骸を見て伴蔵はあとへさがり、逃げださんとするところ、御用と声をかけ、八方より取り巻かれたに、伴蔵もあわてふためき必死となり、捕方へ手向かいなし、死物狂いに切り回り (牡丹灯籠二十 118 下-22 地)

(27) 溜息かみまぜの愁訴しうそしほ萎れ返つて見せるに両親も我を折り其程までに思ふならばと万事を隣家の娘に托して (浮雲一 018-02 地)

これらは順接としても捉えられるが実は境界的な例である。(24)は因果関係が比較的はっきりと理解される用例かと思うが、(22)(23)は「ニヨ」という形式で極めて終助詞に近く((22)は倒置と取った)、順逆にかかわらず何らかの強意が込められているものだとも解釈できる。また(25)は、「頬が冷やりとしたことに目をさまし」のように前件が体言相当のものとして理解でき、このニは格助詞的なものであると解釈できる。(26)(27)も同様である。

以上のように調査範囲内での順接の確例はわずか1例となる。

補助的に、これよりも時代の遡る黄表紙や洒落本でのニの用法の実態を確認する。数値は図表3末尾に示した⁸。これらの資料では、ニが中心に使われているようで、ノニの使用は稀である。ニはやはり逆接の用法が多いが、三馬作品よりも順接用法の使用頻度が高いようにも思われる。その用例は三馬作品などとは違って確例と言えるものが現れている。

(28) [茶] おさむいにおーツ [内] 花紫様とうふおあがりなさいませ (郭中奇譚 306 下-11 茶屋の主人)

(29) 久しぶりだに、鳥渡参らふかと思ひやす。(辰巳之園 299-09 志厚)

(30) コレかゝ、久しうて御出なされたに、何ぞ上ましたい。(聞上手 064 下-10 男)

(31) さんや、でへぶいぶるによ。ちつとさしくべればいゝ。(通言総籙 366-02 おちせ)

三馬作品より少々前の時代に当たる 18 世紀の後半の資料では、ニの順接用法も幾分か使用頻度が高かったようで、19 世紀に至る頃に順接用法が駆逐されたような様相

⁸ 用例は『郭中奇譚』(洒落本大成)『鹿の子餅』『聞上手』『鯛の味噌津』『無事志有意』(嘶本大系)と他は『黄表紙洒落本集』(日本古典文学大系)より採取。

が資料の上では見られることになる。

以上のように、調査資料内では順接用法は境界的な例が多く確例はほぼ見られず、逆接用法が中心であることが確認できる。

3.2 ニにおける分析的傾向

3.1節で見たようにある時期までニは因果関係表現の一端も担っていたわけだが、その因果関係表現について、江戸語から東京語における変遷が詳細に調査された論考として、吉井(1977)がある。この論考では因果関係表現における「カラ」・「ノデ」の台頭の様子が明らかにされており、次のようにまとめられている。

- a 「から」が文学作品の中で会話文に使われはじめるのは一七〇〇年ごろからである。
- b 一七六〇年ごろ(明和ごろ)から「その他」の使用が急激に減少(約二割に減る)し、「から」が条件表現形式の中心となる(約八割を占める)。
- c 一八〇〇年前後から「ので」が散見されるようになり、一八五〇年ごろ(安政ごろ)から「ので」の一応の位置が確立したと考えられる。
- d 一八九〇年代までに「その他」の使用がほとんどなくなり、「ので」の使用率が高まり(約一～一・五割)、定着した。(22p.)

今回調査した資料の内、最も時代が上るものでも浮世風呂の1809年であり、その時点で因果関係表現に関しては、「カラ」や「ノデ」といった因果関係表現の専用形式がそれ以外の表現形式をほぼ駆逐しているということがわかる。また、次のような記述もある。

会話的文章においては十八世紀ごろ「その他」の条件表現形式を駆逐して「から」の使用が急増する。その理由は、①江戸時代初期に関東で民間に使われていた「から」が、江戸の都市化、町人文化の発展、日常語の文章表現化などとともに、庶民の親しみやすいことばとして一般化したこと、②「ば」などのように、いくつもの条件表現を担っている形式が変わって、原因・理由のみを表す「から」を使うという分析的表現への動きがあったことなどであろう。(22-23p.)

「分析的表現への動き」については、田中(1965)に詳しい。田中(1965)では近代語成立過程における「分析的傾向」を3つの傾向にまとめている。

- ① 整理 ある表現をになう表現単位の種類が少なくなった。
- ② 単純 個々の表現単位の意味や機能が、かぎられた、せまいものになり一般に表現内容が単純になってきた。

- ③ 分散 複雑な表現をする場合には、その表現内容を、いくつかの単純なブロックにわけてしまって、単純な表現単位のコンビネーションによって表すようになってきた。(17p.)

こうした「分析的傾向」について田中(1965)は特に近世から近現代への流れの中、つまり本論文の調査範囲に該当する時期に顕著に現れるとしている。

しかしこの「分析的傾向」というものが、一段と顕著に見られるのは、近代語の成立過程の中でも、特に現代語の成立過程においてである。(18p.)

江戸語から現代語へ、というプロセスにみられる、諸々の変化、変遷を以上のようにまとめてみると、おもしろいことに、わたくしが「整理の現象」としてまとめたものは、だいたい江戸時代末期におこった変化なのである。(中略)

さきに「単純」としてひとまとめにしたものは、みな明治初期に目だってきた変化である。(中略)

最後に上げた「分散」の現象が発展するのは明治末期以後とってさしつかえないように思われる。(20p.)

ニは前述の通り、本来の接続助詞としての働きが曖昧なものである。そのことから、近代日本語表現における「分析的傾向」への流れの中で、他の専用形式(「カラ」など)が発達したことにより因果関係表現としては淘汰され(「整理」)、同時に担う役割が情意的な逆接という意味に限定されていった(「単純」)のではないだろうか。このニの「単純」化への流れは、田中(1965)の指摘よりも早いことになるが、やはりこの「整理」と「単純」という現象は表裏一体に進んでいくものと考えられるので、この変化も「単純」の一種であり、一概に時代を分けてこれらの現象が進んでいくとは言い難いようである。

3.3 ノニの意味用法の限定

ニは「整理」、「単純」化によってその意味用法が情意的逆接に限定された。その現象が起こっている状態の折り、準体助詞の発達によってノニが現れた。このことが、ノニが情意的逆接専用形式となった要因のまず一つであろう。

また、もう一点として「句的判断の対象化」(山口(1996)参照)の問題を考えたい。山口(1996)に、次のような記述がある。

ある形式が接続形式として句と句を相関させるためには、原理上少なくとも二つの条件を満たすことが必要であろう。その一つは、前後両句の意味関係を何らかのかたちで示しうることである。が、そのためには、相関させられる前句が後

句とほぼ対等の具体性をそなえた句的判断として捉えられていなければならない。すなわち、接続形式は先行する句的判断を前句として対象化するものでなければならない。それが今ひとつの条件となると考えてよい。(104p.)

それは原理上の話だけではなく、実際「ある接続形式からそれに基づくより分析的な形式が形成される場合、後者はもとの形式における句的判断の対象化を強めるかたちを取っている」(104p.)とし、そうした現象の一つとして、モノなどの形式名詞の付加が上げられている。つまり接続助詞は例えば形式名詞の付加などによって、前件の独立性をより強くする形で変化していくということである。

また、阪倉(1993)に、逆接確定条件表現は「前件をあえて強調しておいて、しかもこれと矛盾する後件との屈折した統合を実現しようとする」(124p.)点に、その特色があると指摘され、その前件強調のための形式名詞要素としてモノやトコロが上げられている。そのトコロを含む接続助詞トコロデ・トコロガについて、齋岡(1972)の論考があり、トコロデは元来順接用法を持っていたが、それが見られなくなり、逆接の接続助詞として定着する、という調査結果が出ている。その調査結果について、阪倉(1993)では次のように考察する。

この間の事情を明快に説明しきことは難しいが、考えられる理由としては、まず、この「ところ」のような形式名詞で前件をまとめることは、前件を強調することになり、後件との対立を際立たせて、むしろ逆接条件的な接続にふさわしいものになる。順接確定条件としての「ところで」が姿を消した理由は、まず、ここにあると思われる。(132p.)

形式名詞による前件の強調、これは山口(1996)の言う「句的判断の対象化」の現象の一つと考えられるが、それが逆接の意味を強化するという指摘である。こうした現象は、ニからノニへの変化にも当てはめることができそうである。ニは準体助詞「ノ」の付加によって前件の強調効果を強め、それにより逆接としての意味をより強めたのではないだろうか。原口(1978)に、ニにおいては他の助詞よりも長く準体法が残存し、天保以降も多く行われるという指摘があるが、それに対して、接続助詞のニにおける準体助詞の定着は天保の頃に十分に見られ、幾分早いように思われる。この点も逆接において準体助詞「ノ」が効果的に機能したという傍証ではないか。

こうした「句的判断の対象化」と逆接の関係については今後の課題として、順接を含め形式名詞的要素をもつ他の接続助詞も合わせ、さらに考察を深めていきたい。

また、調査資料中、ノニという形式には逆接の意味ではない使われ方が見られた。
(32) 燕^{まんし}枝^{とうはる}が當春のはなし初^{ぞめ}に自作^{こしらへ}やした嵐^{あらし}の花^{はな}おぼろの月影^{つきかげ}といふ呼物^{よびもの}をはなし

ますのに^{わつち}私^{よしはらしんぶんいまようすがた}が吉原新聞今様^{しんさく}姿といふものを新作しやしたから (安愚楽鍋三上
24ウ-3 落語家)

(33) 非常に雑踏しましたよ お天気が宜のに日曜だツたもんだから (浮雲二
086-15 勢→文三)

これは「はなしますことに加えて」「お天気が宜ことに加えて」という累加の表現
であり、ニにも見られる用法である。

(34) 浪花さん^{らうくわ}も奇麗^{きれい}な拳^{けん}ぢやアねへ。声^{こゑ}が早い^{はや}に手^ては出し切^{きり}で、指先^{いびき}をおつにごま
かすはな (風呂三上 180-02 婆文字→はね・豊猫)

(35) 第一^{だいいち}坐敷^{ざしき}が上手^{せうず}だに。芸^{げい}が能^{いひ}ときてゐるに。面^{めん}がまぶいと云^いふもんだから。
(床初上 103-04 じゃんこ熊→all)

この用法は格助詞的、または並立助詞的な用法とされるものであるが、この前後の
事柄が食い違ったり対照的であつたりした場合に、それは逆接と解されるわけで、接
続助詞的とも解される。しかしこのようなノニを使った累加の表現はあまり現代には
見られない。こうした用法にノニが使われなくなっていくのも、ノニという形式が逆
接専用となつて弁別性が高まる、という「整理」「単純」の現象の一つかもしれない。
ただし、浮雲においてもこうしたノニの累加表現が見られることから、このノニが淘
汰されるのはさらに時代が下つてのことになるだろう。

4 まとめ

以上見てきたニ・ノニの消長についてまとめる。

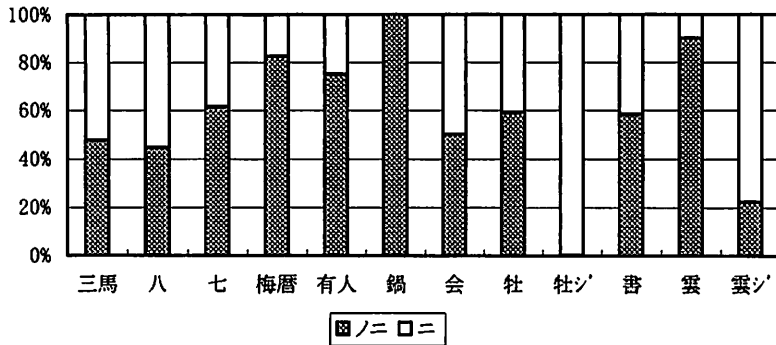
江戸後期から明治初期にかけて、準体助詞「ノ」の発達とともに、ニが衰退しノニが
台頭してくる。ニは主に男性において残存するが、明治初期の段階には定型的表現が
多くなり、ほぼ駆逐されたようである。その中で意味用法は「分析的傾向」に向かっ
て変化する。ニは複数の意味用法を担っていたが、田中(1965)の言う「整理」、「単純」
といった流れの中で、逆接に限定されていった。ノニはその流れを受け、準体助詞「ノ」
による前件強調の強化も加わつて、逆接専用形式として定着したものと思われる。

ニ・ノニの今回扱ったもの以外の意味用法についてや、それぞれの文末における用
法について、またニ・ノニに類似する意味用法を持つモノヲやその他の逆接確定条件
表現の形式についての考察は、今後の課題としたい。

[資料(図表1~3)]

図表1：ニ・ノニ使用比率

形式	三馬	八	七	梅曆	有人	鍋	会	牡	牡シ	書	雲	雲シ
ニ	20 53%	15 56%	10 38%	7 18%	8 25%	-	2 50%	16 41%	2 100%	5 42%	1 10%	7 78%
ノニ	18 47%	12 44%	16 62%	33 83%	24 75%	1 100%	2 50%	23 59%	-	7 58%	9 90%	2 22%
計	38 100%	27 100%	26 100%	40 100%	32 100%	1 100%	4 100%	39 100%	2 100%	12 100%	10 100%	9 100%



図表2：ニ・ノニ男女差

	三馬作品			八笑人			七偏人		
	ニ	ノニ	計	ニ	ノニ	計	ニ	ノニ	計
男	12 67%	6 33%	18 100%	14 61%	9 39%	23 100%	10 37%	16 59%	27 100%
女	8 40%	12 60%	20 100%	1 25%	3 75%	4 100%	-	-	-
計	20 53%	18 47%	38 100%	15 56%	12 44%	27 100%	10 38%	16 62%	26 100%

	梅曆			有人作品		
	ニ	ノニ	計	ニ	ノニ	計
男	2 17%	10 83%	12 100%	4 27%	11 73%	15 100%
女	5 18%	23 82%	28 100%	4 24%	13 76%	17 100%
計	7 18%	33 83%	40 100%	8 25%	24 75%	32 100%

	安恩楽鍋			会話篇			牡丹灯笼			書生気質			浮雲		
	ニ	ノニ	計	ニ	ノニ	計	ニ	ノニ	計	ニ	ノニ	計	ニ	ノニ	計
男	-	1 100%	1 100%	2 50%	2 50%	4 100%	8 30%	11 41%	27 100%	4 36%	7 64%	11 100%	1 50%	1 50%	2 100%
女	-	-	-	-	-	-	8 40%	12 60%	20 100%	1 100%	-	1 100%	-	8 100%	8 100%
計	-	1 100%	1 100%	2 50%	2 50%	4 100%	16 41%	23 59%	39 100%	5 42%	7 58%	12 100%	1 10%	9 90%	10 100%

図表3：ニ・ノニ意味用法

用法	三馬作品		八笑人		七偏人		梅暦		有人作品	
	ニ	ノニ	ニ	ノニ	ニ	ノニ	ニ	ノニ	ニ	ノニ
逆接	20 87%	18 100%	15 100%	12 100%	10 100%	16 100%	7 100%	33 100%	8 100%	24 100%
順接	3 13%	-	-	-	-	-	-	-	-	-
計	23 100%	18 100%	15 100%	12 100%	10 100%	16 100%	7 100%	33 100%	8 100%	24 100%

用法	安愚楽鍋		会話篇		牡丹灯籠		書生気質		浮雲	
	ニ	ノニ	ニ	ノニ	ニ	ノニ	ニ	ノニ	ニ	ノニ
逆接	-	1 100%	2 100%	2 100%	16 100%	23 100%	5 100%	7 100%	1 100%	9 100%
順接	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
計	-	1 100%	2 100%	2 100%	16 100%	23 100%	5 100%	7 100%	1 100%	9 100%

用法	牡丹(地)		浮雲(地)	
	ニ	ノニ	ニ	ノニ
逆接	2 50%	-	7 100%	2 100%
順接	2 50%	-	-	-
計	4 100%	-	7 100%	2 100%

用法	洒落本		江戸笑話		黄表紙	
	ニ	ノニ	ニ	ノニ	ニ	ノニ
逆接	8 62%	3 100%	6 67%	1 100%	4 100%	-
順接	5 38%	-	3 33%	-	-	-
計	13 100%	3 100%	9 100%	1 100%	4 100%	-

〔参考文献〕

- 此島正年(1966)『国語助詞の研究』 桜楓社
- 阪倉篤義(1993)『日本語表現の流れ』 岩波セミナーブックス 45 岩波書店
- 田上稔(2000)「明和安永期洒落本の準体法」『女子大文』128
- 田中章夫(1965)「近代語成立過程に見られるいわゆる分析的傾向について」『近代語研究』第1集(『近代日本語の文法と表現』明治書院 2001 所収)
- 齋岡昭夫(1972)「「ところが」と「ところで」の通時的考察—その逆接仮定条件表現用法の成立時期をめぐって—」『国語学』88
- 原口裕(1978)「連体形準体法の実態 近世後期資料の場合」『春日和男教授退官記念語文論叢』 桜楓社
- 山内洋一郎(1970)「接続助詞が・に・を・ものから・ものの・ものを〈から〉〈ので〉〈のに〉」『国文学 解釈と鑑賞』35-12
- 山口堯二(1996)『日本語接続法史論』 和泉書院
- 山田正紀(1936)『江戸言葉の研究—浮世風呂・浮世床の語法—』 普通教育研究会
- 吉井量人(1977)「近代東京語因果関係表現の通時的考察—「から」と「ので」を中心として—」『国語学』110

(みやうちさやか・東京都立大学大学院生)